
ポー姫とリト星～七夕にささぐ～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポー姫とリト星〜七夕にささぐ〜

【Nコード】

N4294M

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

ポーランド（織り姫もどき）がリトアニア（彦星もどき）を探するために各国のいちゃいちゃに負けずにがんばるお話

ソノイチ（前書き）

七夕ですねっ

七夕の前にあげるとか言ったくせに当日になってしまっすいませ
ん。

リトポです

ポーランドとスウェーデンの口癖が上手く真似られてるか不安です
が（笑）

天の川が厚い雲の向こうにあるであろう今夜、せめて小説の中で満
天の星空を感じて、ポーランドのどたばたぶりを楽しんで頂ければ
幸いです

では召し上げ

ソノイチ

「今日は何の日かもちろんしってるよな？」

ヨンスが目を輝かして言ったのが今日の小さな事件の始まりで

「知らんしー」

ポーはキムチチゲをむぐむぐしながら答える

ちなみにキムチチゲはヨンスの陰謀によりキムチの割合が通常の五割増しだ

みるからに辛そうな真っ赤な色

汗だくだぜー？つとによによるヨンスに、うっさいしーと半眼で睨む

「今日は七夕の日なんだぜ」

「タナバタ？」

「オレが起源のいかした祭だぜえ！！」

マンセーっつとぴょこぴょこジャンプしながら嬉しそうに笑う

「へー」

はふっ、はふっ

もぐもぐ

ごくん

ポーの無反応さといったら…

「ちゃんと聞くんだけー!!」

むっきー

”くるん”をビンビンにしながら怒るヨンス

ポーは最後の一口を食べ切り
口を拭いて一言。

「てかキムチチゲ美味くね？」

「だよな!!…じゃなくてオレの話を聞けなんだぜー!!」

「ヨンスいまの顔なにそれーまじウケるしー」

…二人は似た者同士のようにです

若いから落ち着きがないところなんてとくに

若さゆえですかね、ええ。

- - 10分後

「おれヤバくない？」

「なかなか似合ってるんだぜー」

ポーはまんざらでもなさそうに長い裾を掴んでその場をぐるりと一周した

ポーがいま着衣しているのはヨンスのこの七夕祭のコスチュームである織り姫の衣装だ

床に付くほどのたつぷりとした一枚布を何枚か重ねていて、その上に透かしの入った薄桃色の布がふんわりとかかっている

天女の羽衣がイメージなのだ、とヨンスは得意そうに笑った

「あ、ちょっと待つんだぜ」

ヨンスはポーのさらさらな金髪をお団子にして左右にくくり星の付いた簪を飾る

「おれ鬼かわいくね？」

「…予想外」

姿見に全体をうつしてポーはご満悦だ

色白小柄なポーに織り姫の衣装は恐ろしくよく似合った

女装して似合わなかったらポーを笑ってやろうと意気込んでいたヨンスは若干ナーバスだ!!

「俺まじかわいーし。なあヨンス、これリトにみせてきてもいいーだろ?」

「すきにするといいんだぜ」

ヨンスはくるんをフニャフニャにさせて体育座りだ

対象的にポーは鼻歌を歌いながらご満悦で帰り支度を始める

「あ、そーだ。」

玄関まで来てポーは面倒くさげに振り返った

「なんなんだぜ?」

ヨンスはキムチチゲを食べていつもの無駄な元気を取り戻しかけていた

「七夕ってさあ……………中国んこの祭じゃね?」

ばたん

ヨンスは一瞬目が点になったがはっとして叫んだ

「お…俺は世界の起源なんだぜー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ヨンスの声は空しく無人の玄関に響いた

.....

「リトー」

「うわぁっ」

ポーが勢いよく扉を開けると眉毛…もといイギリスが飛び上がって
お茶をひっくり返した

「な、なんだよポーランド、いきなり驚かせやがって」

「リトがここにいるって聞いたしー」

ポーはきよろきよろとあたりをみまわし、クッションを裏返して
”リトー”と呼びかけている

「ああ、さっきまでいたな」

ポーはくるりと振り返るとむくれる

「さっきまで？」

「会議の連絡に訂正があるっていつてわざわざ来てくれたんだ」

あいつはほんとに気が利くからなあ、とイギリスはスコーンをぱくつきながらぼやく

「ホワット？なんの騒ぎだい」

「げ、アルフレッド」

「なんだ起きたのか」

だばだばなパーカにこれまただばだばなズボン姿のアルフレッドが目を擦りながらやってきた

眼鏡をしていない

なんだか新鮮だ

「やあポーランド、すごく可愛い衣装だな」

「そういえば確かに」

アルフレッドとイギリスは興味津々にポーをみつめる

「あんま見んなし」

ポーはなんとなく照れ臭くなってソファの影にかくれる

そんな様子も逆効果（？）で可愛いのだがポーは気づかない

「あ…ササ…だ？」

ポーは隠れるまでは見えなかった角度に大きな笹があるのをみつけた

しかしポーは言い終わる前に首を傾げる

ササにしては赤や黄色や青や紫の葉っぱがいっぱいある

「これはなんだし」

「これは短冊って言うらしいな」

イギリスは得意げに七夕には短冊に願い事を書いてつるすと願いが叶うという言い伝えがあるんだ、といった

「さっきヨンスが言ってたことそのままだね」

「…つるせー」

アルフレッドは軽快に笑うと眼鏡をかけてポーを笹の元に手招きした

「これに願いをかくのか」

「そうなんだぞ」

ポーが一番近くにあった桃色の短冊を裏返す

”ヒーローとして世界の平和を守れますように”

「…」

無言でめくり治す

”アイスクリームをお腹いっぱい食べられますように”

”ピンチの時は大活躍して女の子たちにもてますように”

「どうかなっ」

「…これ何枚あるんだし」

「139枚さ」

「わお」

ポーは可哀相なものをみる眼差しでアルフレッドをみた

視線を言語になおすなら

”てめーは小学生か”、ってところでしょうかねえ…

「なんだイギリス、君は何も書かなかったのかい？」

「お前みたいに不確かな星に頼むことなんてねーからな」

「相変わらず硬いなあ、君は」
「ほっとけ」

ポーは二人の会話を聞き流して短冊を裏返し続けていたが、ふと空色の短冊が目に入った

一つだけいやに奥のほうにあったからだ

まるで見つからないように隠しているかのような

「あ。やっぱり筆跡が違っし」

「あ、まで、それ……!!」

イギリスは何故か慌てだす

ポーはにやりとわらった

素早くそれを笹から外すと書いてあることを大きく読み上げる

「”アルフレッドとずっと一緒にいられますように”」

「うああああ!!読むなよばかぁー／／／／」

イギリスは机に突っ伏して唸っている

「…お前星になんか頼らないんだったんじゃねーの？」

ポーはあほらしさに呆れ、つつたつたまま冷ややかな目でその様子

を傍観している

「イギリス、ほんとに君は馬鹿なのかい？」

数瞬呆気にとられていたアルフレッドだったが、肩をすくめてイギリスの頭を撫でる

イギリスは頭を左右にふって”違う、違うんだ。これはナニカの手違いで…”と顔をあげようもしない

ちなみに耳まで真っ赤である

「ほら、顔みせて」

抵抗するイギリス

ため息を一つつくと

アルフレッドはニヤリと嘲った

「う、うわぁ!？」

アルフレッドはたやすくイギリスをお姫様抱っこで抱え上げた

「星が頼りないっていうなら」

イギリスの耳に自分の口を寄せ顔を近づけてウインクをする

「こんなまどろっこしいことせずにさ、オレに直接言えばいいんだぞー!」

予想外だったのだろうか。

顔を歪めてぱちぱちと瞬きした

そして

「ああ、うん…／＼そうだな。今度からはそうするよ」

イギリスはアルフレッドの胸に顔を埋めてくすぐったそうに笑った

「あの一、俺帰るし」

ポーは死んだ魚の目をしている

「あれポーランドまだいたんだな。帰ったかと思った」

「じろじろみんなよ、ばかあ」

見せつけてんじゃんかよ

ポーは心の中で毒づいた

「そういえばリトアニアはスウェーデンのところに行くっていったな」

「行ってみるし。じゃ」

ポーはげんなりしながらイギリスの家を出た

そして振り返りドアを睨みつけ頬を膨らませた

「…俺とリトだって…」

…あらあら何考えてるのか、ね

.....

「リトー！..」

「あ、ポーランドさん」

「ん」

寒さの厳しい地域の特徴なのだろうか、重厚な木のドアをくぐると
室内の温かい空気かながれ込んできた

「可愛い格好ですね」

「でしょ、やっぱそう思うっ？」

「はい。とっても似合います。ねえ、スーさん」

「んだな、めんげえ」

フィンのほのぼの空気にやられ一瞬ここに来た目的を忘れてしまったポーだったが

「って、違うし。リト！リトはここにいるだろ？」

「リトアニアさんならついさっきおかえりになりましたよ」

「…まじで」

話によればリトはポーがフィンからずっと借りっ放しだった漫画を返しに来たのだそうだ

ほんとに…リトは嫁ですね
げふんっ

「あーそーいえば。ずっと借りてて悪かったしー。あれすっげメルヘンな話だったよな」

お目めばっちりの金髪縦ロールの主人公の女の子が眠ってる間に木馬にのせられ、ぬいぐるみの世界に連れていかれてしまうということでも斬新(?)なストーリーを思い出す

「そうですね」

フィンは意味ありげな視線をスウェーデンに送る

スウェーデンは目をそらす

フィンは楽しそうに笑って言った

「実はこれスーさんのなんですよ、ねっ」

「……なにばらしてんだ」

「はぁあぁっ……!?」

この目の前の体格の良い北欧の暴れ者のスウェーデンが両手で少女漫画もち、はらはらと涙を流しながら読む姿を想像する

想像して

想像して。

吹いた

「……ぶはは……！お前そんなでかぶつなのにメルヘンっ」

「スーさん可愛い物好きですもんねー」

あはははと笑う二人の背後に、スウェーデンの影が迫る

「静かにすんだ」

「ひよあつ」「なんだし!？」

少し不機嫌そうな（多分きつと照れてる）顔でスウェーデンが二人を抱え上げた

「うわぁ、高いっ」

「何すんだし…うゃ!！」

「…」

スウェーデンは二人を凄い勢いで凝視する

怯え、だまる二人。

そして

二人を抱きよせまま頬ずりした

「…めんげえ」

「っ?くすぐつたいですっ!！」

「離せえー!！」

「おめだちほんとにめんげえ」

「ちょ、苦しいですって」

「タンマ、スウェーデン!!タンマって、ぎゃあー」

30分後

「…。(ポーが現世に回帰しふらりと立ち上がる)」

「どした」

「…。(指で玄関を指差す)」

「帰るだか」

「…。(ポー頷く)」

「…。(2kgは痩せたフィンが眩しそうに手を振る)」

「またこいよ」

「…!!(ポー頭をぶんぶん横にふる。若干涙目でスウェーデン宅から転げるように去る)」

こうして、この空白の30分間に何があったのか

「…スーさん」

「ん」

フィンは大きく息を吐き出してからこてん、とスウェーデンの肩に頭を預ける

「今日は七タらしいです」

「んだか」

「スーさんだつたら何をお願いしますか」

「そだな…」

スウェーデンは少し思案した後にフィンの肩に手を回して顔をフィンのふわふわの髪に埋める

「おめとずっといられるような、がな」

ふふ、とフィンは小さく笑ってスウェーデンの首に腕をまわす

「じゃあ僕と同じですね」

「んだか」

「はい」

…あれ？めでたしめでたし（笑

.....

ってそうもいかない

主人公は金髪織り姫なポーであることを思い出そう。

「リトー」

「ポーランドさん」

着物姿の菊は声に振り返り、柔らかい笑みを浮かべた

「リトアニアさんならついさっき行ってしまいましたよ」

「……………もうやだしー」

「ポ、ポーランドさんっ？」

ぐずんと鼻を鳴らしポーは遂に涙をこぼした

「どうしたのです?」

菊はぐずつくポーを縁側に座らせて訳を聞く

「俺は…リトっ、にこの格好をみて欲しかったっ、だけっ、だしっ。
なっの、にっ」

「見つからないですね」

「リトのばか」

膨れたポーは縁側の縁を握ったり離したり足を投げ出してぶらぶら
させたりとせわしない

そんなポーを菊は孫を見守るように優しい眼差しをしている

「ポーランドさん、今日は七夕ですよね」

「知ってるし」

「織り姫と彦星は必ず出会えます。二人の間にどんなに大きな川が
あったって、どんなに邪魔が入ったって、二人は必ず惹かれ合う」

ポーはいつの間にか泣き止み、真剣な眼差しで菊をみる

「さあ、これを」

「これは」

菊はすつと懷から短冊をだした

真っ赤な短冊をみてポーは無償に泣きたくなった

「どつすればいいんだし」

ソノ二

「短冊に願いをかけてみてはどうですか、仮にも今ポーランドさんは織り姫様なのですから」

菊はそういうとにこりと笑った

暮れはじめた空に一番星が輝く

ポーランドは妙に素直な気分になって慣れない筆で短冊に願いをこめる

” リトにあえますように ”

菊は優しく頷くとポーの短冊を庭にあった竹の一番高い所に飾ってくれた

「ありがと菊。お前超いい奴だな」

「いいえ当然な事をしたまでですよ」

ポーが清々しい気持ちでリト探しのために歩きだそうとすると、菊はその肩を掴む

「ポーランドさんは必ずリトアニアさんに会えますよ、絶対」

「…？なんでそんなに言い切れるんだし？」

「だって」

菊は満面の笑みを浮かべる

「リトアニアさんは自宅に帰ると言っていましたから」

「……………」
「そ、それを早くいえいいいいいい！！！！！！」

ころころと黒笑する菊にポーはむくれつつ駆け出した

ふう。

ため息をつく菊

「ええ、でもほんとに」

菊はひざ元にいたポチくんを抱き上げて大分暗くなった空を見上げる

運のいいことに今日は例年になくはつきりと天の川が見えた

「二人が楽しい時を過ごせますように」

やっぱりなんだかんだ言っても菊はいい人なのです

.....

ばたんっ

「あ、おかえり」

キッチンの戸を開けるとリトが調理をしながら振り返りもせず
に挨拶を寄越してきた

「もう。どこ行ってたの？随分遅いじゃない」

ポーは返事もせずにリトに直行する

「今日の夕食は…っひゃあ!!?」

「リトのばか」

ポーはエプロン姿のリトに後ろからしがみつく

「ポー?どしたのその格好」

「なんで」

「…ポー」

「う…っわぁん」

「わぁあ、どうしたの」

「リトのばか…!!」

リトはなんとか振り返り、ポーに目線を合わせる

「なんでっ、織り姫がつ、会いに行くためにがんばってたんだしっ」

「うん」

リトは事情はわからないがポーの目をみながら優しく金髪を指で梳く

不思議だ

それだけでポーは涙がぴたりと止まってしまったのだから

「リトが悪いし」

「うん、ごめん」

「もうどこか行くなし」

「うん。どこにも行かないよ」

その答えを聞いて安心したのかポーはおでこをリトにくっつけて上目遣いでいった

「リトー。好きだしー?」

「…／／／はいはい。俺も好きだよ」

リトは目を合わせることなく口早に言ってそっぽを向いてしまった

「なに照れてんだし」

「照れてないよ」

「照れてる」

「うるさいっ／＼」

リトのお家の空にも満天の星と天の川があった

巡り会えた二人のために

苦笑いした神様が

”しょうがないなあ”と呟いて

一つ、流れ星を流した

ソノ二（後書き）

どうでしたか？

リトアニア登場短かつ！！
ってツツコミはおいといて…W

笹に短冊を吊して夢を描く

そんな日々は遠い昔に過ぎ去ってしまいました

皆さんは今夜願いが叶うなら
どんな願いを笹の葉に托すでしょうか？

さて。ヘタリア小説をだいぶ書いて来ましたがどうですかね。

このカップル、このシチュで小説を書いて欲しい、とご要望があればやってみたいとも思っています

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4294m/>

ポー姫とリト星～七夕にささぐ～

2010年10月9日19時35分発行